

白川論文をめぐる議論について

2017.09.21 南雲

白川論文に対して大谷氏は、革命について書かれておらず、「資本主義社会の民主化」の主張でしかない、と批判している。全く正当。白川氏は、プロレタリア革命ないしは社会主義革命を目指していない。

ここでは、大谷氏の主張に対する批判的コメントを羅列しておく。

- ① 過渡的綱領と人民民主主義綱領は異なる。前者が最大限綱領と最小限綱領とを橋渡しするものであるのに対し、後者は最小限綱領である。
- ② 「人民」と「プロレタリア階級」とを等置している。これは、双方の無概念化につながる。
- ③ 人民の民主主義闘争の拡大→二重権力化→革命という構図は、二重権力を目指すべき状況とすることになる。
- ④ 「官僚制国家資本主義」が「歴史的必然性」との関連で説明されているが、官僚主義に強調があり、それをもたらしたとされている機械制大工業（化）との関係が不明瞭である。
- ⑤ 「下からの民主主義的統制」が「経験を積む」のはよいとして、「二重権力化する」（つまり一方の権力となる）とはどういうことか？ あるいは〈社会主義革命の「解放区」になる〉とはどういうことか？ 「二重権力化」から革命への過程は？

そもそも、行政と経済の二つの領域における「下からの民主主義的統制」に寄って社会主義を準備するということは、すでにベルンシュタインが主張したことである。問題はむしろ、プロレタリアートの政権奪取によっては、資本主義的経営を一挙になくすことはできないというベルンシュタインの問題提起を、どのように解決するか（プロ独の政策）という点にある。

現在ベルンシュタインを検討している身としては、『赤いプロレタリア』西葛西論文をめぐる議論にせよ、白川論文をめぐる議論にせよ、「修正主義者」vs「正統派」という論争の構図に重なった。マルクス主義やレーニン主義を修正する試みがベルンシュタインの主張に似てくることを再確認できたのは、収穫であった。

多くの論者のロシア革命総括は、かつて得た知識や考え方が固定観念となっていて、ここの新しい解釈を付加するにとどまっている。そうではなく、まず、生起した事実を徹底して調べることから始めなければならない。